

もう推量された方もあつしやるかも知れませんが、幼児に漢字を上手に教へるやり方といふのは実は簡単な事です。

実際に世の中で使はれてゐる漢字を、具体的なものから順番に教へて行けば良いのです。昆虫が好きな子供なら「^{あり}蟻」や「^{てふ}蝶」や「^が蛾」といふ漢字を書いて見せれば宜しいし、動物好きな子供には「^{ねこ}犬」や「^{ねこ}猫」や「熊」といふ字を示して教へれば良いのです。そして、くれぐれも注意して欲しいのですが、「学校」を「^{がっこう}」とひらがなで教へないで下さい。一度「^{がっこう}」と覚えた子供が、それを「学校」と覚え直すには大変な努力が必要なのです。この時点で子供は漢字^{ぎら}嫌ひになるのだと思はれます。「学校」の方が「^{がっこう}」より覚えやすいし、二度覚え直す必要が無いとしたら、なぜ、最初から「学校」と教へていけないのでせう。^{ぜ ひ}是非、漢字で教へてやっていただきたいと思ひます。

書くのは、また別な事です。読める字でも書けないといふのは当り前の事です。最初は読めるだけで良いのです。何度も何度も読んでゐるうちに大体の形が頭の中に入って、少し注意して見れば書き方も判る、といふ風にもって行くのが最善です。かうすれば、あまり苦勞せずに漢字を書くことが出来るやうになるでせう。

幼児に字を書いて示してやるには、カードに書いて示してやるのが良い方法です。白いカードに美しく正しい字で漢字を書いて、「これは^{はと}鳩よ。クークーと優しい声で鳴く、^{あり}子ちゃんの好きな鳩よ」「これが^{あり}蟻よ。今日、空地でパンくづを運んでみたのを見たわね。蟻さんて働き者ね」などと言ひながら見せてやれば、子供たちはすぐ覚えます。

最初のうちは、あまり何枚も見せない方が良いでしょう。詰め込みはいけません。いくら栄養が良いからといって食べ物を無理矢理詰め込めば、子供はその食べ物が^{きら}嫌ひになってしまひます。漢字も同じことです。

一番良いのは、子供が好奇心を起して「これなあに」と聞いた時に教へてやることです。さうすればほとんどの場合、一度で覚えるでせう。しかし、繰り返しも必要ですから、飽きさせない程度になら、何度繰り返しても結構です。

カードで字を教へることを一種の^{ほうび}褒美として、生活の中に組入れるのも良い方法です。「今日一日、^{わが}ちゃんは良い子だったわね。褒美にカード遊びをしてあげませう」などと言ひながらカードを見せるのです。最初の日は一枚でもかまひません。次の日に覚えてゐるかどうか

確かめて、もし覚えていたら、喜んで褒めてやります。それだけで子供は満足します。もっとやりたいとせがむやうになるかも知れません。さうなったらしめたものです。段々とカードの数を増してやりませう。けれども、あまり欲張り過ぎないやうにすることが大切です。子供は一面飽きやすいものです。注意力も持続しません。早目、早目に切り上げませう。もっとやりたいとせがむ位の所で切り上げるのが、興味を明日につなぐコツです。

子供の好きなお話の中に出て来る言葉の中で、子供の興味をひきさうな言葉を選んであらかじめカードに書いておき、話しながらそのカードを見せて行くといふのも良い方法です。全部覚えてしまったら、「今度はちゃんがお話してごらん。うまく出来るかな」と、子供にお話させるのも良いでせう。子供は大人の真似をするのが好きですから、喜んでお話をするでせう。ただし、さうでない子供もあつてせうから、今までの例をただ鵜呑みにしないで、あくまでも例として考へて下さい。工夫次第で実践法はいくらでもあります。それぞれの子供に合ったやり方を工夫するのが、お母さん方の知恵の見せ所です。かうした愛情のこもった交流の中で、子供は大きく成長します。前にあげたジツコ・スセデ

ィック夫人の著書の中で、スセディック夫妻の長女スーザリは、かう述べてゐます。「私は、ママが私たちがお腹にゐる時から膨大な時間を費したことを知つてゐるわ。そして私たちがどれほど愛されてきたかといふことを、今もしみじみと感じるわ」

これが理想の親子関係ではないでせうか。かういふ親子関係を築いた背後には、ジツコ夫人とその夫ジョセフ・スセディック氏のなみなみならぬ愛情と創意工夫の数々があるのです。皆さんも是非、スセディック夫妻に倣つて素晴らしい子供に育てて下さい。

次の章では、幼児期からの教育によって見事な英才を育て上げた実例を一つ紹介します。単に知能が勝れてゐただけでなく、円満で純潔な人柄で人々の愛を集めたカール・ヴィッテといふドイツの大法学者が、なぜにそれほどの人物になれたかといふ話です。これは偉大な父性愛の物語でもあります。